

恩師高瀬礼文先生
江戸ソバリエ第1期開催当時の思い出
笠川 哲
(江戸ソバリエ講師・おだわらそばくらぶ主宰)

江戸ソバリエプロジェクトを立ち上げることになったとき、リーダーのほしひかるさんと打ち合わせた結果、シンポジウムの基調講演と耳学講師に高瀬礼文先生にお願いすることになった。先生の蕎麦打ちを語っていただくと考えてのことだった。

ところが、先生は以前の鎌倉の住所からすでに転居してしまい、その後しばらくは全く音沙汰が途絶えていた。

そんなとき、小田原のある小料理屋のママさんから聞きずてならぬことを耳にした。その方から「大学の先生で、自分で蕎麦を打つ人がいる……」。しかもボトルキープがしてあるという。

札を見ると「高瀬礼文」とある。しかし住所も電話番号も知らない。ただそんなわけで偶然にも高瀬先生の引っ越し先が小田原の地であることが分かった。

それからまもなくしての、ある日の出来事である。

近くの蕎麦屋で、蕎麦前のひと時を楽しんでいたら、そこのご主人が「近くに住む人がこんな本を置いて行った」と1冊の本を見せてくれた。

その本こそ高瀬礼文先生の著になる『そばの本』であった。しかも一番後に著者の住所が書いてあったが、偶然にもわたしの居住するマンションと一致していた。驚いた。

かくて偶然の積み重ねから、探していた先生の引っ越し先の住所が分かったのである。

早速ながら先生のご自宅を訪問してみた。

そこにはまさに高瀬礼文先生がおられ、扉を開けてくれた。来意を告げると、招き入れてくれた。

わたしにとってそこは幽玄の地であり、先生の一大コレクションの場であり、住居の場であった。

框を上がると大きなカメがある。古代メソポタミア文明のころのカメであった。カメには返しを入れるのにふさわしいと聞いていた。また「Schirer Str.」なるドイツの道路標示のオリジナルが掲げてあった。聞くと、そこは「せっちん」とのこと。ドイツ留学時代から引っ越せば、その都度自宅のその場所に掲げているとのことである。

廊下に沿って長く設けられている棚には、タコ唐草紋の一見高価そうな蕎麦猪口が並べてあった。

部屋に入るとそこは2面解放の角部屋であった。大きなソファとロッキングチェアなどが並べられ、くつろげる空間を作り上げていた。

中でも威圧的ともいえる電子オルガンが威風堂々とその部屋の中央に置かれていた。おそろおそろその価値を伺ったところ、不朽の名著『そばの本』の印税すべてをつぎ込んでも足りない額と聞いた。

かくして当方のお願い事を述べる段になった。

当時、衛生上の観点から長らく食品を手で扱うことはご法度であった。蕎麦打ちも例外ではなかった。しかし先生は「蕎麦打ちは芸術の一つなり」と唱えて自ら蕎麦打ちを実践し、楽しんでおられたのだ。

やがて、その禁止令は解除され、鎌倉小町通りにある「山路」という蕎麦屋では日々300人分の蕎麦を打ったそうだ。やがて蕎麦商の組合から頼まれて、幾度となく蕎麦屋への手打ちを指導されたのだ。

こうした実績は、千代田区の「江戸開府400年記念事業」に参加した江戸ソバリエ認定講座第1期耳学講師として堂々たるものであった。

以上